慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Walter Hinck : Das deutsche Lustspiel des 17. und 18. Jahrhunderts und die italienische Komödie
Sub Title	Das deutsche Lustspiel des 17. und 18. Jahrhunderts und die italienische Komödie, by Walter Hinck
Author	中田, 美喜(Nakada, Yoshiki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1966
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.21, (1966. 4) ,p.72(61)- 75(58)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00210001-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

Walter Hinck: Das deutsche Lustspiel des 17. und 18. Jahrhunderts und die italienische Komödie

中田美喜

ドイツの喜劇について語ろうとするとき、もはやいつまでも常にきまったように "Minna von Barnhelm" から説き起すべきではない、そうすることはむしろ疑いもなくドイツの最初のすぐれた喜劇であるこの作品の、真の意味や価値を誤解することにもなりかねない、一つの作品または一人の作家の偉大や卓越を客観的に評価するためには、その作品または作家にとってそれらが自己の偉大や卓越を築き上げるための基盤となったもの、一つの個性を取り囲む非個性的状況としてあるときはその個性に対立的に、あるときは相関的に、またあるときは支配的にも作用したところの歴史的諸条件——といってもそれは特殊に文学にかかわるものに限るが——いいかえれば要するに個と伝統との交叉の様態の正しい認識は不可欠のものであるが、たとえば当の "Minna" の場合に、この作品ないし作家 Lessing の「個性」については一応ともかく、他方「ドイツ」、「喜劇」、「伝統」などといったものの理解はそれに比してあまりにもきめが粗く、研究が不充分ではあるまいか——Prof. Walter Hinck (Köln) の近著 (Stuttgart 1965) の根本動機は、いうならば以上のような呼びかけや問いかけの形に要約できるであろう。

かような課題の設定形式は、最も手近の著名な例をもってすれば、かの E. R. Curtius の大著 "Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter" と同種のものであり、従って、たとえ一方のドイツ喜劇を 17・18 世紀に、そして副題も示すごとく他方を Commedia dell'arte と Théâtre Italien に限定するにしても、まず何をおいても、ヨーロッパ文学に関する広範な文献学的資料と知識を実施上の前提とするとともに、実施そのものにある程度強い実証主義的そしてまた比較文学的立場をしいないではおかない。しかし著者は、近代のドイツ喜劇はヨーロッパ喜劇との種々の関連において眺められてのみ正しく理解されるという彼の大前提の実証にあたって、単にいわゆる実証主義的方法や比較文学的作業のみならず、現代の洗練された解釈学的方法も、それが有効であるかぎり十分に利用している。このことは、この著が単に「影響」の事実の確証や集積のみを目的とするのでなく——かりにそれにとどまるとしてもわれわれ日本の研究者にとってはそれ自体大いに有益なのであるが——、それらの事実の確認の上にのみ成立し得るところの、伝統の新しい姿

を取り出すことを目ざすものである以上、また当然であろう。すなわちこの著は，新ラテン劇から Schiller や浪漫派に至るまでのドイツ喜劇に対するイタリア喜劇の影響史である ばかりでなく、独立したドイツ喜劇史 そのもの、喜劇というジャンルにおける ドイツ文学史 たらんとするもので、その基底には、イタリア旅行で Goethe が強く感じたのと同じ、その喜劇とイタリアとの同一視という大胆な発想がひそんでいると思われる。しかしながら、この著の方向性は何よりもまず著者自身のいう「自給自足的ないわゆる国民文学的な」文学史への対決の姿勢のうちに端的に示されているものといえよう。

ところで実際この著の功績としてわれわれに最も興味深く感じられるのは、この著が、17・18 世紀の文学一般に対する 従来われわれが馴らされてきた理念史的叙述、すなわち、Gottsched の改革によるバロック文学の追放、さらにその Gottsched の合理主義の Lessing による断罪、Goethe と Schiller による Lessing の精神の継承と国民文学の完成、そして浪漫派におけるそれの変質といったような「否定の否定」の図式の、喜劇の分野における止揚を意味し、むしろそれらの作家や批評家たちは立場や主義こそ異なれそれぞれに近代ドイツの伝統の育成に寄与したものであること、というとあまりに当然過ぎるようにも聞こえようが、つまり彼らはおのおの態度こそ異なれ、イタリア喜劇のドイツへの輸入という明瞭な方向をもった大きな営為に等しく参加したものであり、等しく輸入者たちであったことを語らんとするところにある。Goethe を一つの最終点に定めた正反合の弁証法的秩序づけというものは、たしかに理論としての品格においてすぐれ、その正しさも持つが、ドイツ喜劇の 伝統は かならずしも その秩序に 従順たり得ない。Fr. Gundolf の名著 "Shakespeare und der deutsche Geist" (1911) は、近世 ドイツ 文学における Shakespear の受容をドイツ国民文学の自覚の歴史として把え、Goethe をそれの収斂と見たのであったが、ドイツ文学のイタリア喜劇の受容史は、Gundolf の著が——わが国においては特に——それの強力な代弁者となった特殊にドイツ的な文学史観に微妙な修正を迫ることであろう。少くとも喜劇の分野に関するかぎり、17・18世紀は互に否定し合うものの交替といった直線的な連続ではなく、いわば一つのものを取り囲むさまざまな配置がもたらすさまざまな交錯としてここではとらえられているのであり、この方が穏やかであるということは別にしても、より多くの現実性が感じられるのである。

もとをただせば、ドイツ悲劇の伝統に対してそもそもドイツ喜劇を、個別的な作品論の集積以上の脈絡において、伝統形成に価するものとして論じた試みは至って少ないのであり、そのことからだけしても Hinck の労は多とされなければならないであろう。ドイツには すぐれた喜劇が少ない といわれ、それはまた事実であろう。従って文学史が喜劇のために費やす紙数も限られることになり、また文学史のうちでも、前面を占める抒情詩や悲劇を基本とした文学史が優位に置かれることにもなる。しかしいまわれわれは 問いたいのであるが、それは単に ドイツに限られ

た現象であるのであろうか。たしかにイギリスには Shakespeare、フランスには Molière がある。が、そのほかに如何なる喜劇を挙げるべきであるのか。どの国について見ても、喜劇が「おもて」をなすような文学は——イタリア以外——考えられないのである。ということは、ドイツ文学にとって、ドイツの喜劇をことさらに恥じたり、あるいは恥じる代りに、悲劇的文学史・抒情詩的文学史などの側からの過酷かつ不当な批判に曝したりすることに関して一考の余地を与えるものと思われるのである。Hinck が Shakespeare や就中 Molière についてイタリアの影響を挙げるのも、そして近代喜劇というものがおよそ人物類型 (Figur) なしには考えられないものであること、そしてその類型とはイタリア喜劇の類型であることを述べるのも、彼なりの立場における喜劇というジャンルそのものの復権、ドイツ文学における喜劇の正しい定位の意図と解される。すなわちドイツの喜劇は "Minna von Barnhelm" から「始まる」のでもなければ、それや "Der zerbrochene Krug" のほかには「何もない」のでもないということである。もちろん価値評価の問題はそれで解決するのではなく、むしろこれから始まるのである。Hinck の著から個々の作品の徹底的な検討を期待することは無理である。しかしこれまで問題とならなかった作品や、ある作品の従来照明を受けなかった面に関してこの著が以後の考究のために切り開いた分野は新鮮でありみのり豊かなものである。

われわれ日本の研究者にとっては、この著が取り扱う作品の大部分は未知のものといってよい。このことは、それらの作品の価値の有無の論議よりも何よりも、日本の Germanistik の底の浅さと選択の非常な偏りへの反省の材料として謙虚に受け取られねばならない。しかしそれはさておき、たとえばここで当然のことながら重要な地位を与えられる Gottsched と彼の "Versuch einer critischen Dichtkunst" についてのわれわれの認識は一般にきわめて不正確で、あまりに Lessing の側に傾き過ぎてはいないであろうか。この著においてわれわれは、Gottsched の喜劇理論が、かならずしも "Minna" によって「克服」されたわけではないことを知るのであるが、これは E. Staiger もその "Minna" に関する名論文 (1955) でむしろ Lessing の後退、Gottsched への倚りかかりとして指摘するところと一致しよう。また Goethe や Schiller の〔イタリア〕喜劇に対する態度の分析も興味深いが、彼らがこのジャンルに強い関心と深い洞察を有しながら何ゆえに傑作を生み得なかったかの考察も、やや淡白な叙述ではあるが興味をそそるであろう。それから、これはバロック文学研究者としての我田引水のそしりをは免れ難いかもしれないがあえて付け加えるならば、私はこの著が近世ドイツ喜劇を全体として外国喜劇の輸入と模倣としてとらえることにより、従来外国崇拝の学者文学としていわゆるドイツ的伝統から切り離されがちであったバロック文学を、目下はたとえ喜劇の分野のみにもせよ、それ以後の文学と同じ一つの流れのなかに置くことに成功したということに敬意と欣快を禁じ得ない。バロック時代に対する後代の根強い世襲的偏見が戦後ようやく本格的な清算の段階に入ったことは前号の書評の際も触れたが、それは大上段に振

りかぶった演説ではなく、このようなむしろ地味な作業によって少しづつ進行するのである。一つの決して短かいとはいい得ない時代がほとんど完全に黙殺されてしまうということは常識からしても考えられないことであるのに、一旦常識化してしまった偏見が相手である場合には、異端視される危険なしにその偏見と戦うことはできない。(日本におけるバロック文学や合理主義の文学の研究は、われわれの能力の問題以外に、この古い価値観とさらに資料の不足という決定的な重荷を背負わされている)。バロックのしかも喜劇の研究は感動を研究の端緒とすることができないというだけでも甚だ骨の折れる仕事なのである。しかしそれがあげた成果は徐々に効力を示し始めており、たとえば最近の最も標準的な文学史である Helmut de Boor と Richard Newald の文学史の第5巻 "Vom Späthumanismus zur Empfindsamkeit (1570～1750)" のバロック文学の部分は、第4版 (1962) において Gryphius を中心に根本的な改訂を受けているが、これは Hinck ではないが彼同様にバロック喜劇に詳しい Prof. E. Mannack (Berlin) の示唆に基づくものである。Mannack 自身、Hinck が先にこの著の一部を "Gryphius und die italienische Komödie. Untersuchung zum, Horribilicribrifax" (GRM, N. F. Bb. XIII, 1963) として発表したものに裨益されるところ大であったことを、同様有益な彼の論文 "Andreas Gryphius' Lustspiele. Ihre Herkunft, ihre Motive und ihre Entwicklung" (Euphorion 58, 1964) で認めている。

Hinck の強味は彼が Romanistik の領域をも十分に活用し得たということにあり、たしかに彼はそれによって「自給自足」状態を改善し得たのである。われわれ日本の Germanist の状態はどのようなものであろうか。われわれは何をすべきでありまた何をなし得るのであろうか。

(Walter Hinck: Das deutsche Lustspiel des 17. und 18. Jahrhunderts und die italienische Komödie. Commedia dell'arte und Théâtre Italien. 467 S. J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart. 1965)